

現代イスラーム社会における女性のスポーツ行動にみるレクリエーション性

荒井啓子（学習院女子大学）

1. はじめに

「レクリエーション」の概念については、これまで様々な学説が展開されてきた。ここでは、「自由な時間に行われる活動である」という点においては共通していると考えられるが、その活動の意味や目的等には、「気晴らし」「娯楽」「休養」「労働力の保持（疲労回復）」「再創造」「余暇の善用」など諸説がみられる。

語源から引用される意味では、「ラテン語の *recreare* に遡り、原義は *re-*（再び）*creare*（創造する）であり、『つくりなおし』の意をもつ」¹⁾ということがよく知られている。これは、疲労やストレスなどから心身の活力を取り戻すという現実的な活動から、自己実現・自己解放などの哲学的で内観的な活動までを意味していると考えられる。

このような諸説や語源引用からながめると、レクリエーションについての解釈は、広義から狭義まで多岐にわたり、日常から非日常にいたる時間・空間を含んでいる。それは、いかなる活動においても、活動を行う個々の意識や目的によってレクリエーションのタイプが異なって存在するからであろう。

しかし、いずれの場合においても、「安らぎと楽しみを求める人間の本来の欲求にこたえようとするもの」²⁾であり、「遊び」の要素を内包していることは言うまでもない。さらに、「遊びそのものではなく、何らかの意味で価値志向的な面を強くもっている。心身の健康づくりや人びとの連帯をめざしたり、生活の変化と充実を求めるなど、遊びの喜びの中から価値をひき出して生活そのものを活性化し、『つくり直す』という方向性が、レクリエーションという語の中では常に意識されている」³⁾という見解が、様々なレクリエーションへの考え方や活動に現代的な共通点を見い出させているであろう。

このような「遊びの要素」や「再創造」というレクリエーションの特性、つまり「レクリエーション性」は、スポーツの中にも存在する。スポーツにも様々な目的や行動が見られるが、競技スポーツから日常の楽しみや健康づくりのためのスポーツに至るまで、あらゆる場面において様々なレクリエーション性を見い出すことができる。特に「再創造」への志向性は、心身一元論をはじめとする人間の身体に対する認識の思潮から導き出される、スポーツにおける「身体の解放性」に通じるものであろう。

他方、一般に知られているように、イスラーム (Islam) においては、程度の差はあるが、女性はヴェールの着用が義務づけられている。これは、根本聖典である『クルアーン』 (Qur'an/Koran) の第24章「光り」メディナ啓示31節において定められているからである。⁴⁾ イスラームとはアラビア語で「引き渡すこと、委ねること」を意味し、それが「唯一なる神アッラーに自己の全存在を委ねる」⁵⁾という行為を指している。そのイスラームにおいて、クルアーンこそ神からの直接の言葉であり、教えそのものである。したがって、そこに記述されている言葉は、ムスリム (Muslim、神に服従するもの＝イスラーム信徒のこと。女性形はムスリマ Muslem であるが、一般的記述にしたがいここではムスリム女性と表記する⁶⁾) にとって絶対的権威を有する。そこで、ムスリム女性たちは、当然、このクルアーンに恭順し、ヴェールを被るのである。このように、男性の前で（公の場において）身体を覆わなければならないイスラームの女性と、前述のスポーツに内在するレクリエーション性としての「自己実現」「自己解放」との間には希薄な関係性を窺知するこ

とは容易である。

しかし、1993年及び1997年の2回にわたり、イランの首都テヘランにおいて「イスラーム諸国女性スポーツ大会」(Islamic Countries' Women Sports Games)が開催されたことは、イスラーム女性とスポーツとの間に新たな関係性を見出す機会が与えられたと考えられる。この大会は、選手・審判・役員・観客等、大会の競技中に関わる全ての人々が女性に限られていた。なぜなら、競技中の選手は、スポーツコスチュームの間から腕や足を当然出すことになるが、言うまでもなく、選手はムスリム女性として、親族以外の男性に、手と顔以外の自分の身体を見せることがタブーであるためである。

このようなスポーツ大会のあり方は、西欧文化の影響を受けた非イスラーム圏の価値観で捉えると、一見女性のスポーツへの欲求を抑圧しているかのように映る。しかし、彼女たちは、スポーツ以外の様々な生活場面において、イスラームの教えを遵守しながらも同時に、女たちだけの自立した世界を心地良く創りだし、アイデンティティを形成していると、と言われている。⁷⁾ そうであるならば、スポーツ場面においても同様に独自の世界を創りだし、スポーツのもつ「身体の解放性」やそのレクリエーション性としての「再創造」をもち併せていると推測することができる。

そこで、本研究では、イスラーム諸国の中でも特にヴェール着用の制限に厳格な、イラン・イスラム共和国 (Islamic Republic of Iran/以下イラン) を中心に、「再創造」の意味から導き出される「自己実現」「自己解放」の視座に立って、現代イスラーム女性のスポーツ行動を考察し、そのスポーツ行動にみるレクリエーション性について検討することを目的とする。研究方法としては、文献、現地調査及び現地マス・メディアによる資料等を用いた。

2. イスラーム法とヴェール

イスラーム諸国とは、イスラームを国教としている、あるいは国民の大多数がムスリムである国々、と解釈することができる。また、一国のムスリムの割合が全人口の80%以上を占める国(1994年現在、約30ヶ国)や、イスラーム諸国会議機構(OIC)に加盟している国(同、44ヶ国)もイスラーム国家と呼ばれている。⁸⁾

しかし、ムスリムが国民人口の大多数を占めていたとしても、必ずしもその国が戒律の厳しい敬虔なイスラーム社会であるとは限らない。そこには、イスラーム法が大きく影響している。イスラーム法を表す『シャリーア』は、「水場に至る道筋」を意味し、イスラームにおいて正しく生きるための道筋を示している。これはクルアーンに基づいて信徒たちが「神への帰依の道」を辿るようにと意図された、人間の行為に対する規範である。その内容は信仰行為・儀式など宗教的な事項はもとより、民法、刑法などの社会生活に関わる規定も含まれ、さらには日常生活のエチケットや道徳にまで及ぶ。⁹⁾

ほとんどのイスラーム諸国では、19世紀以降ヨーロッパの法律が導入されていて、イスラーム法の全てが適用されているとは限らないが、本研究でとり上げるイランでは、1979年のイラン革命後、イスラーム法を国内法の基本としていて、厳格にイスラームの教えを守っている国である。したがって、女性のヴェール着用は法律で定められているため、イラン女性は、他のイスラーム諸国(サウディアラビア以外の)の女性たちよりもヴェールを被る日常世界を当然としているのであろう。

ヴェール着用については、いくつかの政治的変化によって影響を受けた足跡がある。イ

ランでは1936年には近代化をすすめるパフラヴィー王朝のレザー・シャーによって、ヴェール禁止令が発令された。しかし、1941年、レザー・シャーの退位とともにそれは廃止され、着用の選択が許されていたが、1979年のイラン革命を契機に着用が義務づけられ、現在に至っている。このヴェール着用の義務は、当初西側諸国から「女性の自由を奪った」とする批判が高まった。国内においてもこれに抵抗する女性はいたが、ヴェールを被ることで男性と対等な立場が得られ、積極的に社会進出する女性も増えていった。ヴェールによって、「見られる自分」ではなく「見る自分」になり、かえって解放されているという見解¹⁰⁾もある。近年、イラン社会には、再び新しいウェーブが巻き起こっている。1997年のハタミー大統領就任にみる自由化路線である。女性の服装にも「寛容の兆し」が窺える。

3. 現代イスラーム女性のスポーツ行動の諸相

「身体の解放性」と乖離するかのように見える、前項において述べた「ヴェール文化」の中で、イスラームの女性たちはどのようにスポーツと関わっているのだろうか。ここでは、イランを中心とした現代イスラーム女性のスポーツ行動の諸様相を考察する。

1993年2月、テヘランにおいて開催された「第1回イスラーム諸国女性スポーツ大会」は、当時の大統領・ラフサンジャーニーの次女であり、イラン・オリンピック委員会の副会長を務めていたファーエゼ・ハシェミ (Faezeh Hashami Rafsanjani)が中心となって、体育連盟 (The physical education organization) の協力によって実現されたものである。大会スローガンは、Friendship & Unity「友情と統一」であった。

第2回大会は4年後の1997年12月に開催された。参加国は25ヶ国、参加選手は748名と発表され、第1回 (11ヶ国、546名) をはるかに上回った。開会式において、ラフサンジャーニー最高評議会議長 (前大統領) は、この大会はイスラーム諸国にふさわしく、スポーツの成果というものはイスラームのためにも世界の半分 (女性) にとっても価値のあるもので、家族の健康や教育に重要な役割を果たすことを述べた。また、ファーエゼ・ハシェミ ICWSSC会長は、「この大会を通して、ムスリム女性たちがイスラーム諸国における暖かな協力と深い文化交流を行うことは社会的価値がある」¹¹⁾と加えた。この大会に関して、1994年、イスラーム女性スポーツ大会連帯会議 (Islamic Women Games Solidarity Council) において批准された内規では、「イスラームのルールに照らしてスポーツ大会を開き、スポーツ分野においてイスラーム諸国の女性たちの連帯感を強め、ムスリム女性としてのアイデンティティーを守っていくこと」が確認されている。¹²⁾

つまり、競技スポーツ分野では、ムスリム女性であることを大前提に、スポーツを通して友情・統一・協力・文化交流・家族の健康・教育・連帯・アイデンティティーなどへの志向性が窺える。また、大会で行われたスポーツ種目は、バレーボール・バスケットボール・バドミントン・テニス・水泳・体操などの近代スポーツであり、スポーツ・コスチュームは男性の眼を遮断した上で、ヴェールを外した活動的なものであった。これらの志向性や行動は、ムスリム女性の世界においてのみではあるが、「再創造」の営みと捉えることができよう。

もう一方の側面として、イラン都市部 (テヘラン) において、日常生活レベルのスポーツ行動が活発化していることに注目したい。イラン革命前には富裕層だけで行われていたスポーツが、革命後には多くの国民に奨励され、スポーツ施設が徐々に充実してきていることが一つの理由として上げられる。

テヘラン市内には「スポーツ・センター」が数ヶ所存在する。取材した『ヘジャーブ・スポーツセンター』は、プール、サウナ、トレーニング・ジムを備えており、午前中は女性専用、午後は男性専用と使用時間帯が男女別に当然分かれている。このように時間帯で分けている場合もあれば、男女別々の施設をもつスポーツ・センターもある。ここでは、主に水泳やエアロビクスが行われており、運動後は、ジャグジー・バスやスチームサウナで寛ぐという。水泳のインストラクターの回答によれば、痩身の目的で訪れる女性が最も多く、次いで腰痛や肩こりの治療、そして何よりもスポーツの愉しみのために出かけてくるという。都市部における一部の女性たちではあるが、女性の身体に対するイスラームの教えを遵守しながら、美と健康そして愉しみの一つとして生活の中にスポーツを取り込み新たなライフスタイルを生み出していると言えよう。

4. 現代イスラーム女性のスポーツ行動にみるレクリエーション性

イスラームにおいて、もちろん近代レクリエーションの概念は存在しないであろう。しかし、現代社会における文化構造は複合的であり、緒言において述べたレクリエーションの様々な要素に類似した考え方を、近年のイスラーム女性のスポーツ行動から垣間見ることが出来る。競技スポーツにおいて強調される「イスラーム女性としてのアイデンティティー」、日常生活における「スポーツの愉しみや健康への志向性」は、「自己実現」「自己解放」から「気晴らし」「休養」までの様々なレクリエーション性をもちあわせている。

片倉は¹³⁾、「日本人のことを『エコノミック・アニマル』だと最初に表現したのは、ムスリムであった」と述べている。また、イスラームには「ラーハ」という「休息」や「安息」に近い意味をもつ時間の概念が存在し、「労働をしたから休む、疲れたから休息する、といった受動的なニュアンスは、ラーハにはない。むしろ、ラーハの時間をもつために労働をするといった、能動的で積極的な意義をもっている。」と解釈している。イスラームにおける文化の中から類似するとみられる概念を取り出してレクリエーションと表現することはあまりにも乱暴ではあるが、レクリエーション概念再考の手がかりをイスラームに学ぶことは可能ではないかと考えられる。

<引用・参考文献>

- 1) 今村嘉雄他編、『新修体育大辞典』、不昧堂出版、1997。pp.1577-1578.
- 2) 前掲書1)、p.1578.
- 3) 前掲書1)、p.1578.
- 4) 井筒俊彦、『コーラン(中)』、岩波書店、1995。pp.194-195.
- 5) 板垣雄三、『イスラーム世界がよくわかる』、亜紀書房、1998。p.12.
- 6) 山内昌之他編、『イスラームを学ぶ人のために』、世界思想社、1996。p.12.
- 7) 片倉もとこ、『イスラームの日常世界』、岩波書店、1995。p.92.
- 8) 岡倉徹志、『イスラーム世界のこれが常識』、
- 9) 前掲書5)、p.64.
- 10) 前掲書7)、p.90.
- 11) Islamic Countries Women Sports Solidarity, "Reprt of The 2nd Islamic Countries' Women Sport Games",
- 12) Iran Women Sports Committee, "1st Islamic Countries' Women Sports 'Games", 1994
- 13) 前掲書7)、p.184.